

華術

三才新

全

特260 8

777

納本

始



特260
777



甘泉堂圖



卷道寒元
 筆求三丈嘯
 未生御涼

此二女新あたらきつめ又結むす緒人ひと
 は授し侍と一登のぼる女をいのり
 徳とくを以もてあつたふりし其
 幸さい死し國くに入いりていへば流ながれ
 汲ひる水みづかしくもては道みちを
 踏ふみし

きらひに瓶びんも挿さるる木きの末すえは
 今いましあしを痛いたむものさか
 つくもあはれに送おくる。後あともつらば
 榎木えのきより上あつておきしより年とし久ひさか
 せ名なれれば其その末すえもいへば
 言葉ことば成なりて胎たいにまゝに
 産うまれ



竹居居居地もあつてゝ

持らるる

白

白

白

竹本

白

白

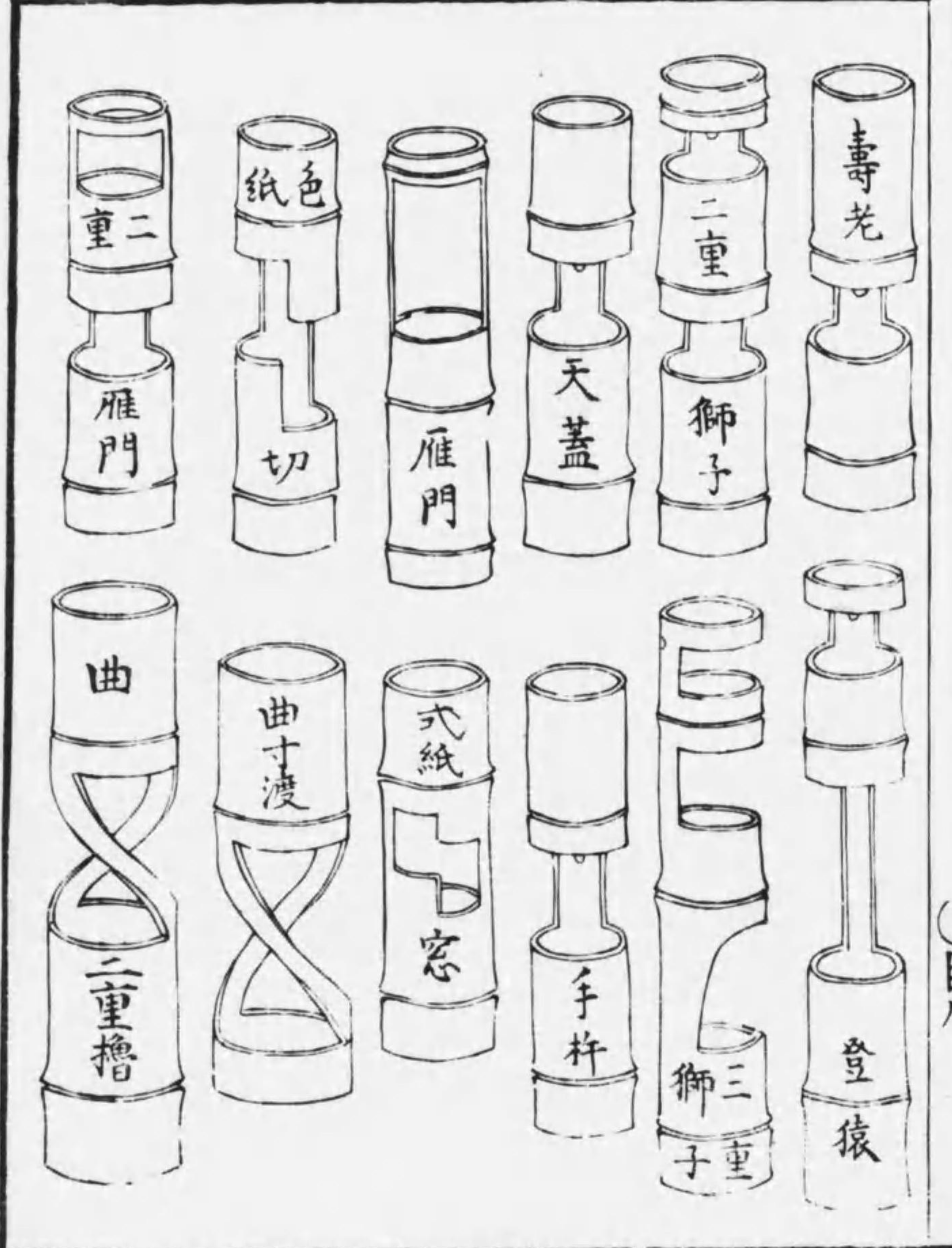
天保六上野
乙未の如月

未生齋廣南

上田周防法眼心

末生 御流 花術三戈噺

拵當御流花道の大意を申す。拵華の要小天地人
 三戈の靈妙を備へて取扱ひし事なふけ三戈の
 為理を言ふと申辨へかろが考要の知く申すを
 各指方より能御承知の事なりませうが。拵花小
 三つ〜釋まふ事と申すなりませ。扱天地人と
 扱ふり各指方より申す事なりませ。えよのこつと一ツと
 天の事と申す事と人と地なりませ。地の事と
 申す事と人と人なりませ。人の事と申す事と



地がなるとして中をまませぬ。あふゆき混雜しつゝます
傳へる天の文字のせい

天 天との一は天なり下は地なり。中ふ人すつらら一文字
なります又一の字とひつくと讀むをませしこと

二刻ら一十の刻ら

天地 是離る半のなりませぬものゝゆざります。
三 時ふ人の中へますは太陽不動の況でござります

この紅色の天字日本ふ初とませし年すうの。寛政九年
かゝる年とござります。既小寛政九年小政曆の
ゆざりまして只今の曆を寛政曆と申す。曆のゆ

天保六年乙未寛政曆とあり。とまゆでのい寛政曆と
あり。彼頃改曆のゆざりましてなせし年号が曆名で
ゆざります。さて寛政改曆の後曆面ふ並しつゝ
括別かたりゆと年ハゆざりませぬが。日月能の取
小政曆す人の東よりからと西の方ふおんるなせしゆざり
ゆと。そは後りた太とゆざります。是を東を東の
率なり。南北の極陰極陽としてけあ極星とる子午
の線とて取あことりゆのりのなり。あが居する処の
天頂より南はさかりもろと子の線と申す。地より
南北ふ掛りつゝ年線の線と申す。こま南は不動の

新風なり。東西もを國々ふよりく変わります。己お
 日本と紅毛との表裏にて。日本の年の刻は。紅
 毛の年が別々あらはる。あつまる日本の日れ出ころの
 ぼんごの日の入なり。さきび日本の東も彼乃
 國の西もあつたけ所の國々も日の出と入る方々
 その國のつらう東と日の入もあつたります。
 かな國々のまとおす

○天は圓くして湿るうへ丸く圓とす。比とまを人
 垢のまを人の天とせしむ。け大安のけの城とす
 半はつたりませぬ。垢とせしむ。うらやうかを天とせしむ。天は圓く

如き天は円くして汁の先を突かすの透る
 もなきものでゆゑります。け天の活物と雖有ま
 妙なり。あつたては東知かすま合せ。神を不於ての
 神とす。佛をての佛とす。儒をての明德とす
 ます。是れ何となさす。天の事にてゆゑります。
 人も奥の山中に抱かす。この天を吸はうはうは
 して。命を絶しつるまはる。食を絶してつる體の中
 さい活くありませぬ。天が始因の出入りありあつ
 ちざります。ゆゑと大命をいふては。口鼻と兼つて
 半時だつても天の出入りあると。あつたては神

ゆと。らんが自かて活らつた。ましませぬ。天が活くと
おくの。わづらひませぬ。叔も。難有とぞいひて
さす。せぬ。もつと。いひ。おと。ま。ち。ま。の。と。り。り
び。つ。を。り。ま。す。

又け。親も。父母の自分。細工と。お身は。この。の。て。ち。
ら。ふ。わ。ら。び。が。お。く。ぞ。ん。じ。と。も。さん。と。務。子。の。い。せ。
す。せ。ぬ。天が。給。め。ふ。這。入。と。細。工。の。ま。ら。う。り。丁。寧。お
括。て。お。く。と。天が。は。く。つ。て。お。り。ま。す。人。も。雀。も。鯨。も。龍。も。
おの。事。け。お。作。ら。ま。す。雷。の。も。れ。品。を。と。音。夜。と
り。ま。す。お。括。ら。め。ま。す。ま。お。天。の。ま。用。な。細。工。作。の

親。お。さ。ぬ。じ。や。お。り。も。天。の。の。天。と。寒。げ。の。天。が
な。ら。う。ら。ん。ど。年。と。ま。げ。の。天。う。な。ら。う。さ。ら。な。の
體。も。家。も。藏。も。さ。ら。り。と。天。の。物。ら。う。あ。ま。が。く。の
ま。ま。な。ら。親。お。一。切。天。より。わ。り。お。で。お。を。り。ま。す。と。
金。銀。財。宝。も。親。と。も。親。と。も。お。我。成。と。と。天。の
お。身。一。お。身。一。お。身。一。今。の。御。み。が。わ。ら。の。の。は。ま。さ。
ま。ら。う。の。や。の。と。お。ま。い。り。と。と。と。と。侍。て。か。ら。ぬ。お。
お。ら。い。返。さ。ぬ。が。なり。ゆ。せ。ぬ。け。を。煙。が。後。の中。へ。志。
い。ま。す。と。自。分。務。子。が。や。ま。す。お。忠。を。男。中。の。お。
お。わ。ら。ぬ。が。かり。ゆ。と。三。國。一。の。大。長。者。で。ら。た。り。ま。す

天の清くあり難有と半と會得しとい。物と潜と
 さらうらふまの不知中う小端うん。天のあきさあふう
 さねりなうん。天のあきさあふう。さう中う小端うん
 て。天と吸と油とせど潜し。さう中う小端うん
 史ての事方うなとね。後ふとさう。又天と中うの一人
 おふらうらう。あまざらう。只一つの天とを思中
 活相人も情と唐獅子も風風も吸り吐り吐り吐り
 まま。け天と中うのやふらう。若魚ととととととと
 ゆす。あうらうらうらう。保し父と子とのあまかくし
 りる父のさあよりくす。さう中うの唐獅子のあまかくし

天の清くあり難有と半と會得しとい。物と潜と
 さらうらふまの不知中う小端うん。天のあきさあふう
 さねりなうん。天のあきさあふう。さう中う小端うん
 て。天と吸と油とせど潜し。さう中う小端うん
 史ての事方うなとね。後ふとさう。又天と中うの一人
 おふらうらう。あまざらう。只一つの天とを思中
 活相人も情と唐獅子も風風も吸り吐り吐り吐り
 まま。け天と中うのやふらう。若魚ととととととと
 ゆす。あうらうらうらう。保し父と子とのあまかくし
 りる父のさあよりくす。さう中うの唐獅子のあまかくし

間遠めり中なり。又星と云ふり。又星と云ふ事。考へ出さる時。自ら覺る。故のやうな星のも。多法にわたりひたり。何事なく。手も。星の。よきまら。天の。妙なり。授けり。なり。人ふ。半の。半も。天乃明。受く。復ち。徳と。此と。極と。悟り。人。天の。事。此の。天文。中。ま。せ。ぬ。

夫の星。初り。星を。平人。なり。夫。大陽。天乃。中。不動。六星。所。繞る。天乃。中。明。今。中。の。度。ご。明。今。中。の。天。通。つ。中。を。明。今。中。の。六星。本。火。土。金。水。の。星。と。地球。なり。地球。一。星。と。各。大陽。の。光。を。受。け。る。事。大陽。の。外。を。水。星。天。

中て。列辰星^{りつてんせい}繞る^{まわ}け外と金星^{きんせい}を中て列^{りつ}たる^た星^{せい}
 繞る^{まわ}。け外^{けがい}の^の黃道^{わうだう}と地球^{ちきゅう}の繞る^{まわ}る^る外^{がい}の^の金星^{きんせい}と
 中て^{ちゆうて}。列^{りつ}星^{せい}繞る^{まわ}。け外^{けがい}と木星^{もくせい}と中^{ちゆう}列^{りつ}星^{せい}
 星^{せい}繞る^{まわ}。け外^{けがい}の^の金星^{きんせい}と中^{ちゆう}列^{りつ}星^{せい}
 中^{ちゆう}て^て二十八宿^{にじゅうはちしゆく}を^を外^{がい}の^の星^{せい}に^に繞る^{まわ}る^る天^{てん}と^と中^{ちゆう}り^ります^{ます}け
 外^{がい}星^{せい}を^を中^{ちゆう}の^の天^{てん}活^{かつ}の^の室^{しつ}と中^{ちゆう}の^のけ^け外^{がい}の^の月^{げつ}
 と遠^{とほ}なる^{なる}家^けか^かり。且^{かつ}黃^{わう}道^{だう}の^の度^ど數^{すう}ハ三百六十五度
 二十又^{にじゅうまた}あり。地球^{ちきゅう}ハ一日^{いちにち}ハ一^{いち}轉^{てん}して^{して}け一度^{いちど}を
 繞^{まわ}る^るあり。九一年^{くわんいちねん}の日^ひ數^{すう}ハ三百六十五日^{さんびやくろくにじゅうごにち}又^{また}日^ひと出^で
 列^{りつ}あり。是^{こゝ}を^を曆^{れき}面^{めん}ハ三百六十五日^{さんびやくろくにじゅうごにち}又^{また}日^ひと出^で

以^も故^ゆハ二十三^{にじゅうさん}日^{にち}ケ月^{げつ}目^め小^{せう}。二十九^{にじゅうきゅう}日^{にち}ケ月^{げつ}目^め大^{だい}
 有^あり。オロシヤ國^{おろしやこく}ハ月^{げつ}ナク大^{だい}小^{せう}の^の月^{げつ}常^{じょう}ハ定^{ぢやう}と
 大^{だい}の^の月^{げつ}二十^{にじゅう}一^{いち}日^{にち}小^{せう}の^の月^{げつ}二十^{にじゅう}日^{にち}と二月^{にがつ}ハ永^{えい}年^{ねん}ハ九
 八日^{くわんぱつにち}と定^{ぢやう}め。旧^{きう}年^{ねん}目^めハ一日^{いちにち}と加^{くわ}つ^つる^る星^{せい}を^を月^{げつ}と^とす
 きて小^{せう}判^{はん}の^の目^め方^{ほう}も^もあり。こゝハ六^{ろく}分の^の一^{いち}ハ^ハあり。是^{こゝ}を
 黃^{わう}道^{だう}の^の度^ど數^{すう}と表^{ひょう}せ^せり。又^{また}こ^こ輪^{りん}を^を横^{よこ}つ^つる^る一^{いち}寸^{すん}
 也^{なり}。○^{まる}也^{なり}ハ^ハ四^し分の^の一^{いち}也^{なり}。故^ゆハ^ハ地球^{ちきゅう}ハ^ハ極^{きよく}へ^へり。又^{また}食^{じき}
 楕^{たい}も小^{せう}判^{はん}故^ゆハ^ハ一^{いち}寸^{すん}也^{なり}。是^{こゝ}日^{にち}月^{げつ}年^{ねん}ハ大^{だい}切^{せつ}の^の器^きなり
 あり。又^{また}是^{こゝ}を^を外^{がい}の^の春^{はる}秋^{あき}夏^{なつ}冬^{ふゆ}と列^{りつ}して。九十^{くわんじゅう}日^{にち}を^を表^{ひょう}
 し。日^{にち}方^{ほう}九^く分^{ぶん}つ。然^{しか}る^る天^{てん}を^を中^{ちゆう}の^の地^ち方^{ほう}の^の定^{ぢやう}と

同字の東西南北と傳へ九十六後と云く百と申す。
一時八刻。晝夜十二時。合々九十六刻。是も百と通
ずるぬなり。けふの寶物皆天竺の氣教。此の
うらぐらぐらおてざらゆと。神佛のすがた。是のじ。
たぐらぐらをす八方の靑の極陰極陽。子午の九を
合せらる。辰がまが。日月相合の安れぬ。日月極陽
月極陰。如法蓮華經より。又行大青と云く。ま
り天竺合神なり。南無に於陀佛も天竺東の
南北を表す。於陀の後光は十八年の卯の刻より
酉の刻まで。明中には十八刻と傳へ。天神七代

ふと七佛の天乃教と大極なり。今極うら。未生
なり。天乃伊方よ七と云く。二十八宿と神と云く。
此ら伊方ふたをさうく。二百六十度と云く。十六
の菊乃御紋の天の七ふたの九を合せらる。教うまの
刻も此合神のまもさる。半と云く。思ましく
是、盤の目と二百六十一と定む。中の了ら六刻二十
ふたなり。是を畧と表す。ゆゑふ中の早ふ。く。あて
石と云く。明女の大陽の如く。て。盤中のへる。人の代
まり。黒白と云く。陰陽消長の性象と云く。一ひの思
なり。將素盤も伊方ふたの教と傳へ。伊方よと表す。

九八十一の數とさざりて。二百六十を過す。玉の
玉のりを陰陽なり。長き陽。長き陰。陽の陰。陽の陽。
六盤を向ふ十二。若ふ十二。是二十部と表し
て。則二百六十を過す。一月小中節と二つの節
あり。黒白を以て昼夜と令ら陰陽消長のを理と
案し。し半の長も日をも後の中け滿つとあり。の
案おむむむむむむむむ

一日一年法陽消長の女ハ百練乃書く妻く若く
琴の糸とちハ七十二年と七十二音あり。なるを
後とす。又後二十と今十二年糸のちとけ

うへからゆゑを數多とりのなり。二陰ハ天地人々大
中水の二節。十二律より七十二音と出す。この
七十二の數々二百六十とみゆふ配當。いづれなる
也。春九十日のうち三月と十八日土用。夏九十日の
六月と十八日土用。秋九十日の内九月と十八日土
用。冬九十日のうち十二月と十八日土用。是は
より十八日づつ地へ配當。いづれなる。南分七十二日
づのり。於てなり。ゆと。お用とやもけ。通うて。こころの
あ。一より百八までの内。死活の數あり。美惡の寸は
し。天地の數。す。家の活の數。と。い。紀。距。い。

地球の直径は九千九百四十七里余
 地球の面積は九千九百四十七里余
 地球の周長は九千九百四十七里余
 地球の質量は九千九百四十七里余
 地球の平均密度は九千九百四十七里余
 地球の重力加速度は九千九百四十七里余
 地球の自転周期は九千九百四十七里余
 地球の公転周期は九千九百四十七里余
 地球の歳差周期は九千九百四十七里余
 地球の章动周期は九千九百四十七里余
 地球の潮汐周期は九千九百四十七里余
 地球の磁気周期は九千九百四十七里余
 地球の電磁気周期は九千九百四十七里余
 地球の熱力学周期は九千九百四十七里余
 地球の力学周期は九千九百四十七里余
 地球の化学周期は九千九百四十七里余
 地球の生物周期は九千九百四十七里余
 地球の地質周期は九千九百四十七里余
 地球の天文学周期は九千九百四十七里余
 地球の宇宙学周期は九千九百四十七里余
 地球の物理学周期は九千九百四十七里余
 地球の数学周期は九千九百四十七里余
 地球の歴史周期は九千九百四十七里余
 地球の文学周期は九千九百四十七里余
 地球の芸術周期は九千九百四十七里余
 地球の宗教周期は九千九百四十七里余
 地球の政治周期は九千九百四十七里余
 地球の経済周期は九千九百四十七里余
 地球の社会周期は九千九百四十七里余
 地球の文化周期は九千九百四十七里余
 地球の文明周期は九千九百四十七里余
 地球の人類周期は九千九百四十七里余
 地球の宇宙周期は九千九百四十七里余
 地球の生命周期は九千九百四十七里余
 地球の意識周期は九千九百四十七里余
 地球の精神周期は九千九百四十七里余
 地球の灵魂周期は九千九百四十七里余
 地球の肉体周期は九千九百四十七里余
 地球の物质周期は九千九百四十七里余
 地球の能量周期は九千九百四十七里余
 地球の信息周期は九千九百四十七里余
 地球の知识周期は九千九百四十七里余
 地球の智慧周期は九千九百四十七里余
 地球の美德周期は九千九百四十七里余
 地球の德行周期は九千九百四十七里余
 地球の功业周期は九千九百四十七里余
 地球の名声周期は九千九百四十七里余
 地球の财富周期は九千九百四十七里余
 地球の权力周期は九千九百四十七里余
 地球の自由周期は九千九百四十七里余
 地球の平等周期は九千九百四十七里余
 地球の博爱周期は九千九百四十七里余
 地球の互助周期は九千九百四十七里余
 地球的和平周期は九千九百四十七里余
 地球的统一周期は九千九百四十七里余
 地球的和諧周期は九千九百四十七里余
 地球的美善周期は九千九百四十七里余
 地球的幸福周期は九千九百四十七里余
 地球的健康周期は九千九百四十七里余
 地球的长寿周期は九千九百四十七里余
 地球的繁荣周期は九千九百四十七里余
 地球的昌盛周期は九千九百四十七里余
 地球的发达周期は九千九百四十七里余
 地球的进步周期は九千九百四十七里余
 地球的希望周期は九千九百四十七里余
 地球的梦想周期は九千九百四十七里余
 地球的理想周期は九千九百四十七里余
 地球的追求周期は九千九百四十七里余
 地球的努力周期は九千九百四十七里余
 地球的奋斗周期は九千九百四十七里余
 地球的抗争周期は九千九百四十七里余
 地球的战斗周期は九千九百四十七里余
 地球的胜利周期は九千九百四十七里余
 地球的成功周期は九千九百四十七里余
 地球的实现周期は九千九百四十七里余
 地球的完美周期は九千九百四十七里余
 地球的最高周期は九千九百四十七里余
 地球的最终周期は九千九百四十七里余
 地球的永恒周期は九千九百四十七里余
 地球的不朽周期は九千九百四十七里余
 地球的永生周期は九千九百四十七里余
 地球的不死周期は九千九百四十七里余
 地球的不灭周期は九千九百四十七里余
 地球的不朽周期は九千九百四十七里余

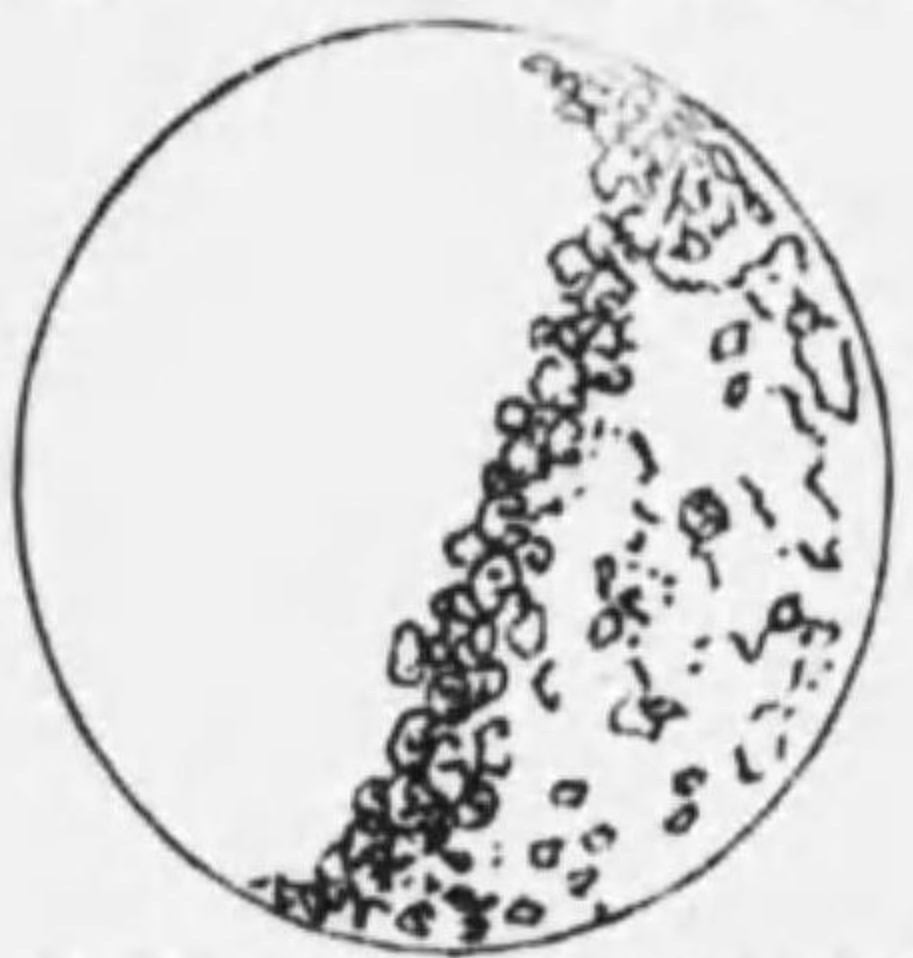
大陽圖



全徑九三万
 九千九百四十七里余

夫日輪の火の如く大なる塊りなり地球の表面を
 ありて小浪の如く如くきつめると日の出入
 りの様々平ふる太陽を大浪の如く如く
 知りたるは宇宙中の磁気がびくあつて是
 なる故に太陽の日の出の如く又中
 心の如く相成りてあつたり。此の如くは太陽の
 方よりあり九十里に及ぶと大なる方よりあり日
 輪の如くありてあるものなり。此の如くは太陽
 地球より大陽までの距離九二百八万九
 百は千七里余

大陰圖



全徑九百七十四里余

月の影なる氷のめくなり水玉のよら
 のありは月のくわち多くくたん
 んんんんんんんんんんんんんん
 少もんんんんんんんんんんんん
 中ふらうらうらうらうらうらうら
 俗に鬼と悪く鬼と悪と主とて
 陽なり
 地球より月輪までの里数九九万六
 九百三里余



水星



金星



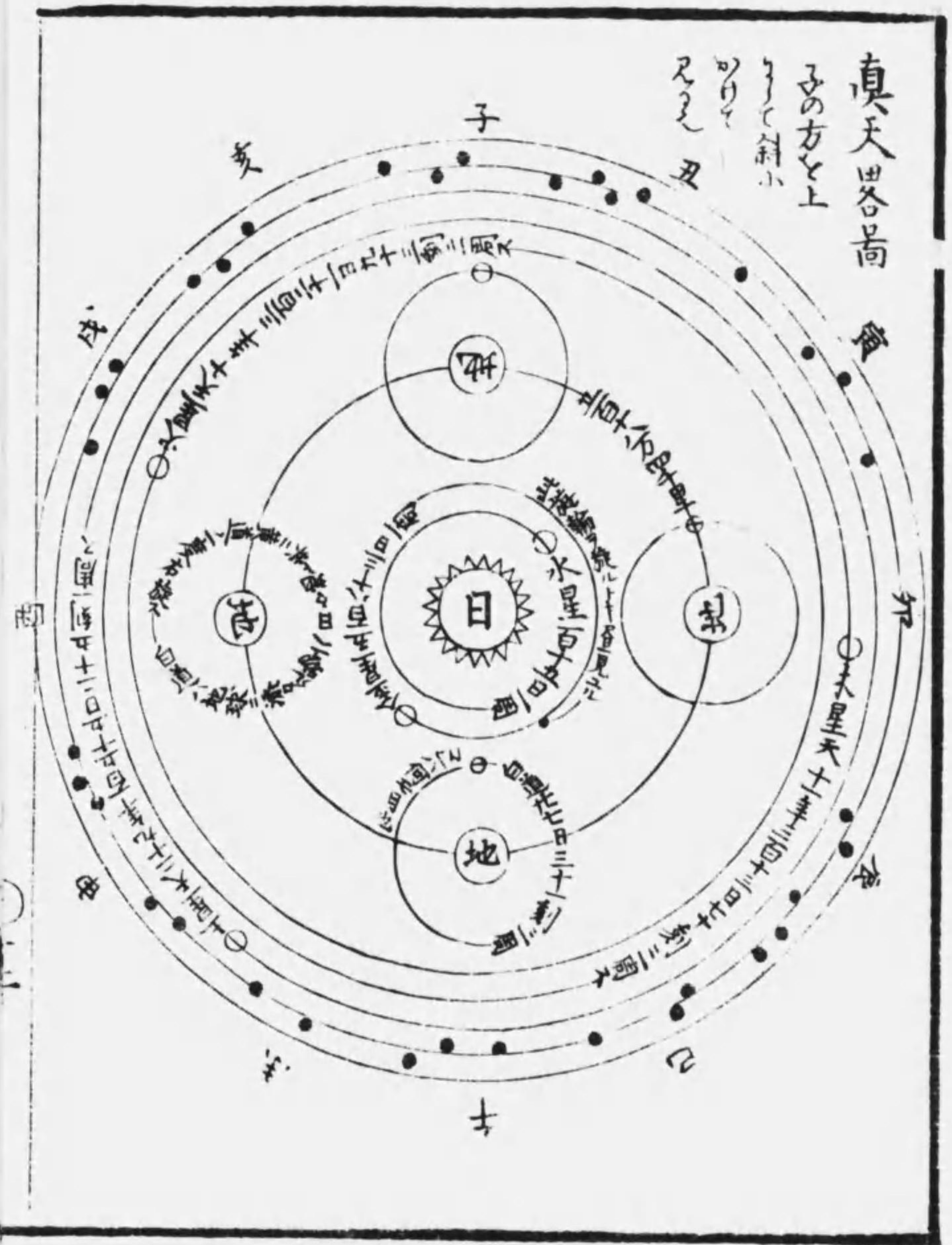
火星

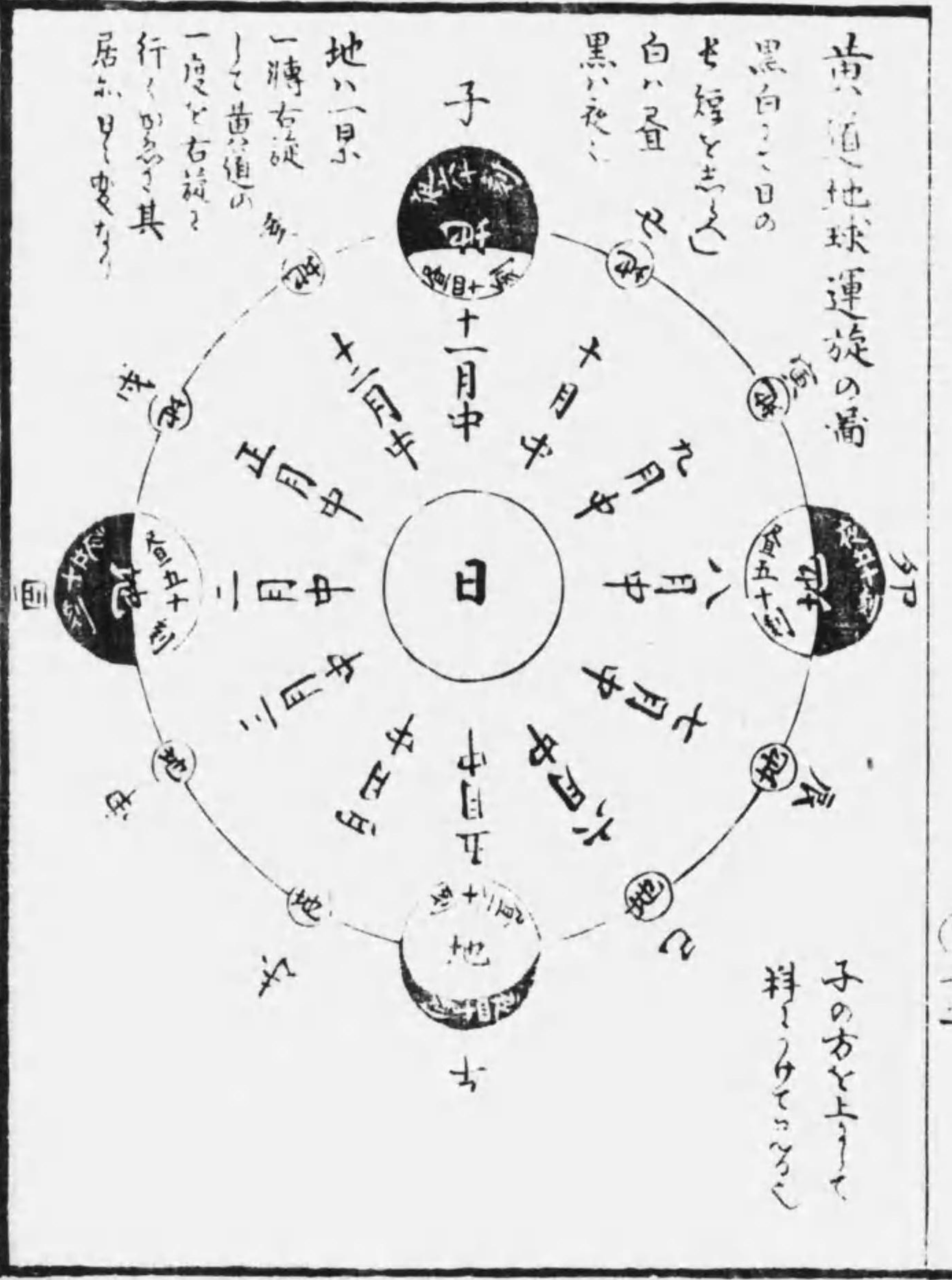
け通り天小二十度度の縫輪を九百十
 八日余小一周を
 日十八度の縫輪を八百八十二日余一
 周は星居るよりくやく入へ半月の
 深女二日月の安うそんりけ星目先
 少くして晨見の時と曉の明星とり
 日ふかそそそ夕見のとこと宵の明星と
 又
 一年三百二十一日九十三刻一週と
 中々思ふよりのありは陽中阴なり



星のどく命ある又星の小星あり大星
 の外と述るをもちきこ有。又くやこあり
 大星よりけ今の大陽の如く。小星へけ今
 の水金星のどくと思ふ。
 星のどく輪ありけ輪七ヶ年毎に波女
 多るなり九二十九年余りて輪星
 と一周とけ波星の周の年分明今の星
 乃知く出たり

真天界高
 子の方と上
 して斜小
 あり
 又
 丑





如象十一月子の月中の日は地球子の方の赤中一
居る。十二月丑の月頃の赤の赤小居る。正月寅の月頃の
赤の赤小居る。二月卯の月中の日は酉の方赤中一
居る。三月辰の月頃の赤小居る。四月巳の月頃の
赤の赤小居る。五月午の月中の日は未の方赤中一
居る。六月未の月頃の赤小居る。七月中の月頃の
赤の赤小居る。八月酉の月中の日は卯の方赤中一
居る。九月戌の月頃の赤小居る。十月亥の月頃の
赤の赤小居る。十一月子の月中の日は子の方赤中一
居る。十二月丑の月頃の赤小居る。

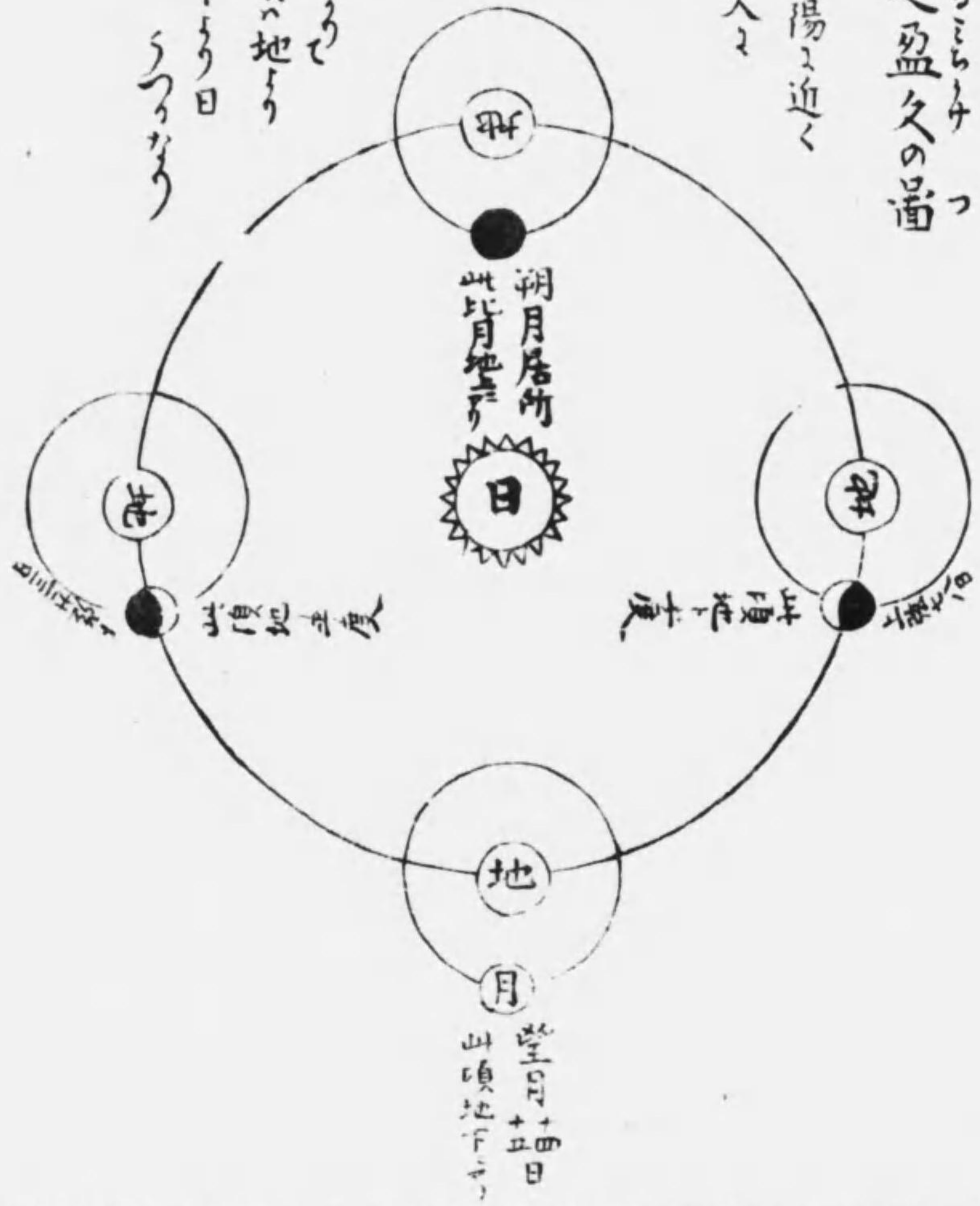
十三

火よりよりわらせぬ六七歩も火より。大なりしやぶとの半は
 うつ。火よりよりわらせぬこと四歩づりうつ。夏は氷の地球
 赤道の南北限と緯ともて大陽より二十度ありあり
 をむらたま道の北北限と地より二十度大陽より二十度
 ありあり。また秋二分のやとい大陽と平度なり。けさ
 理へては春とも日ふき短あることありあり
 叔を暖のよする。地球大陽平度のほも。冬を暖
 行くは冬多秋なり。大陽よりよりまを地より暖行く
 なり地中の空は清くうろ。大陽よりよりまを地より暖行く
 なり地中の暖は清くなり。地球大陽よりよりうける。三月

といれうてさるりす。さるり地中終なるも。むーの
 秋暖と好地は地より。夏は氷のやう結るる不田。地
 中大空の空弁のなると大空冷なり。地上はまなり
 地球大陽よりよりうける。九月は日よりよりかて。さるりす
 ともより地中暖るるも。冬を暖行く進むものも。地
 中より入る。氷のよりより結るる不田。地中大空。地上を
 清く。地球大空は春とも日よりなり。さるりす。四月の長
 経はまを。冬を暖の緯は氷のやぶよりなり。

月白道巡盈欠の圖

朔日の月の太陽に近く
十五日の月の太陽に遠く
又ゆれも
白道も
斜りも
右の多し朔日
頃ハ月上へありて
あり十五日復へ地より
下へあり地より日
うつりなり



蝕限圖

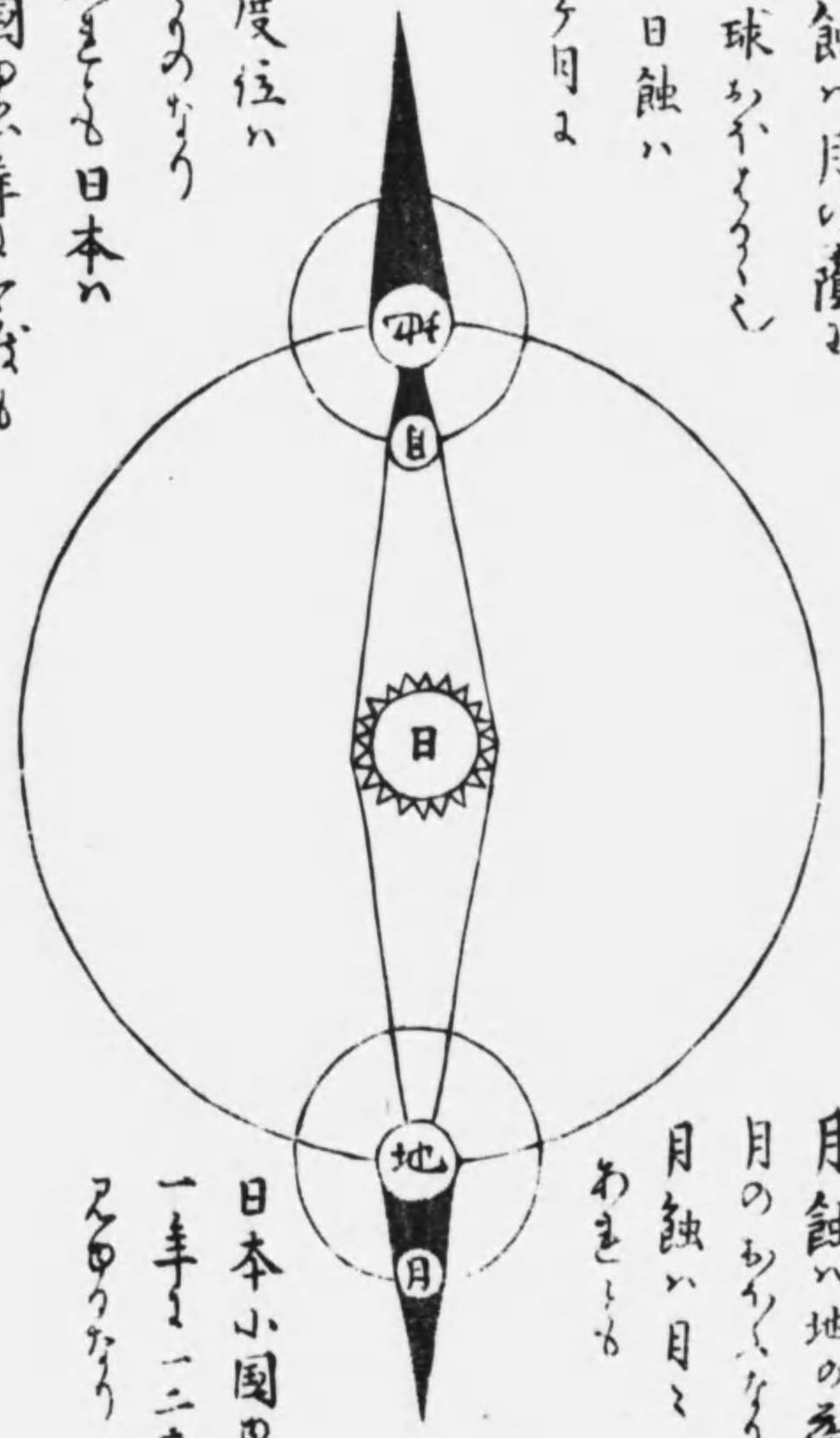
日蝕ハ月の陰
地球をくぐる
尤日蝕ハ
三ヶ月に

上ハ日蝕

下ハ月蝕

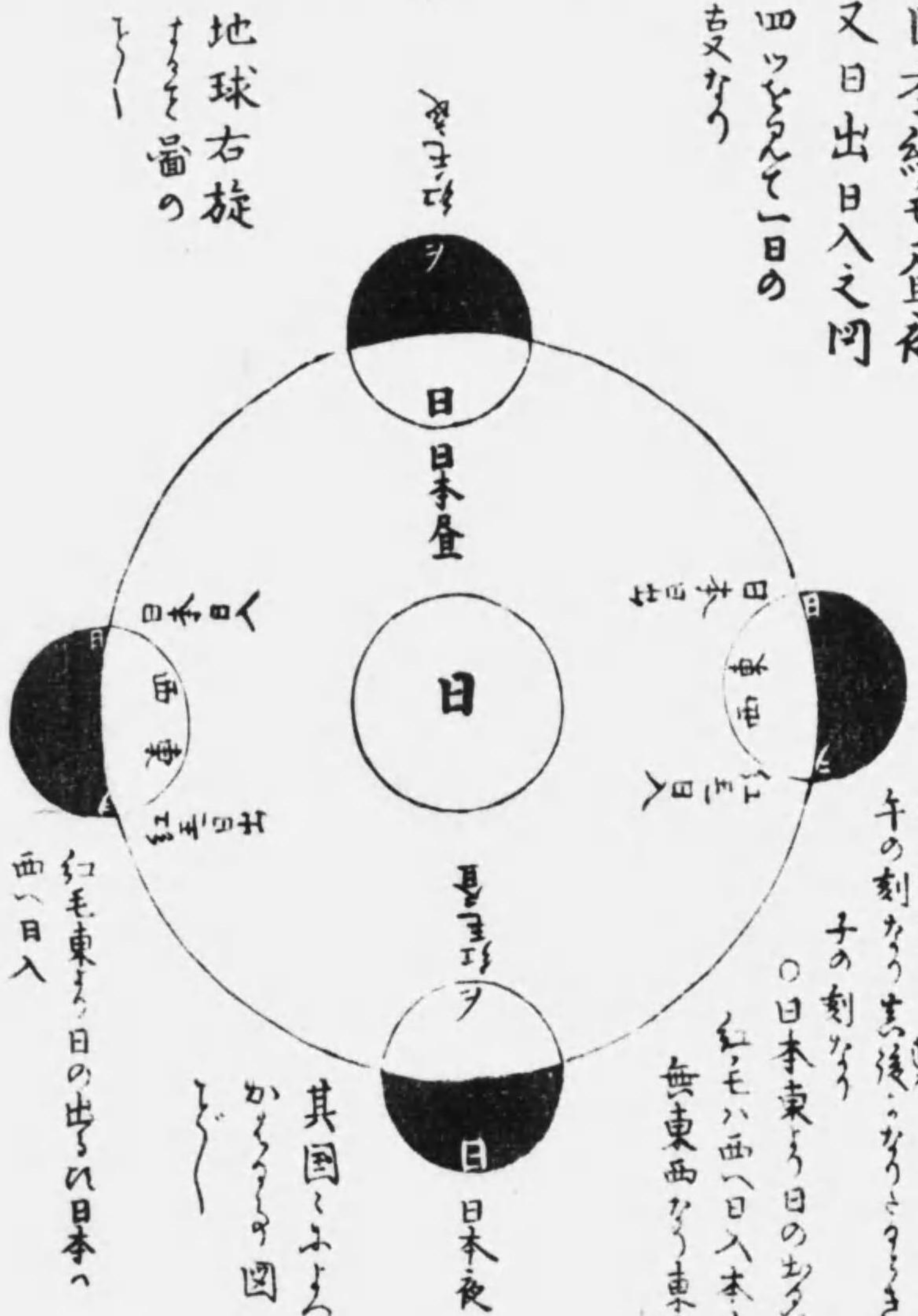
月蝕ハ地の陰に
月の影をくぐり
月蝕ハ月々
あまきとも

一度位ハ
とりのみなり
然るも日本ハ
小國也年々てばも
見え又ハ見えぬ年もあり



日本小國也
一年々一二度
見えたり

日本紅毛昼夜
又日出日入之間
四ツを分けて一日の
吉なり



地球右旋

日本紅毛昼夜

又日出日入之間

四ツを分けて一日の

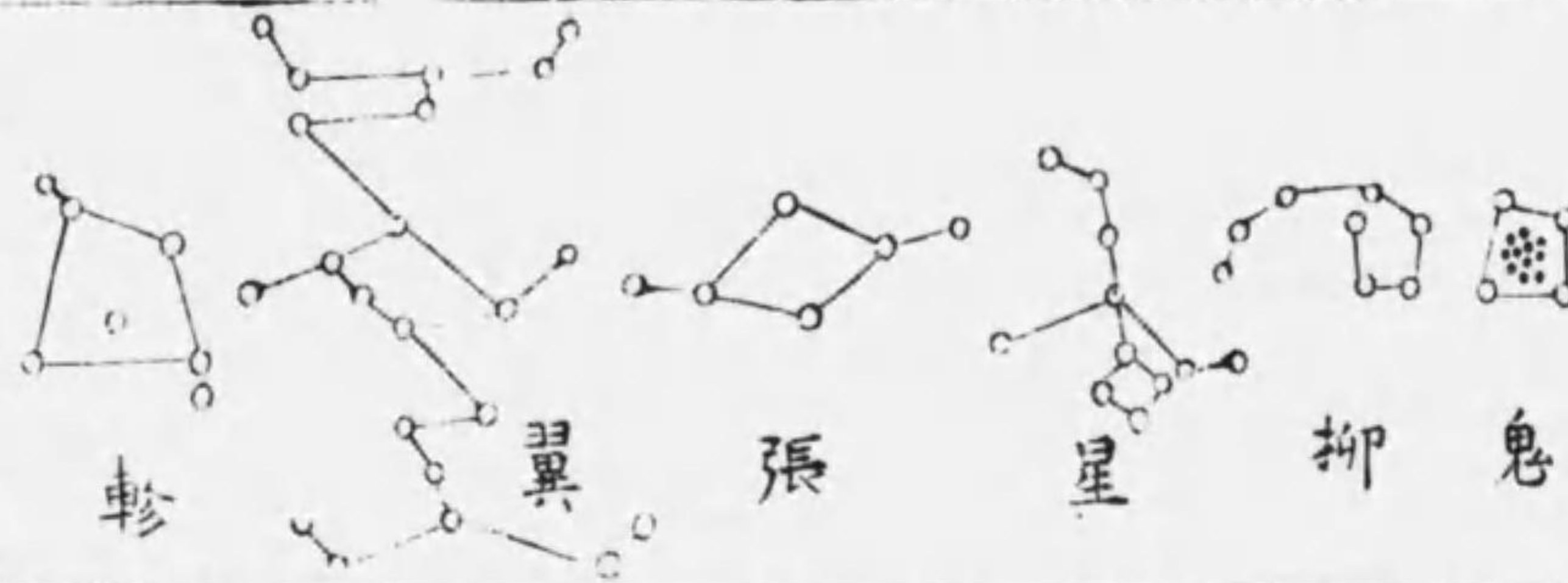
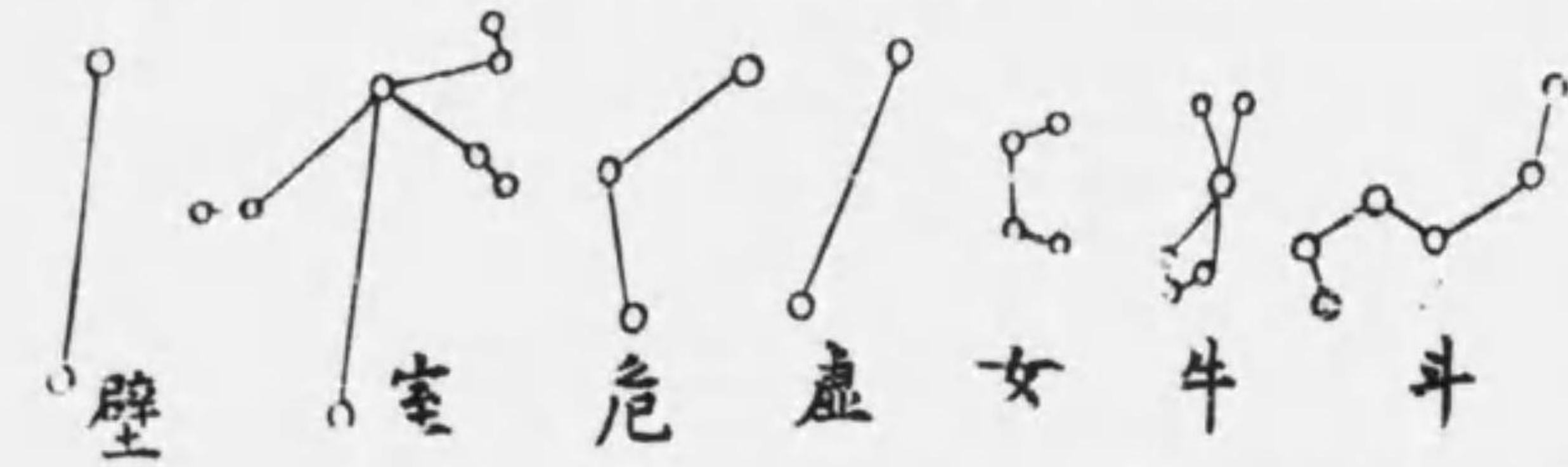
吉なり

何處の國も日輪はまの向の時
午の刻なり其後、なるなる
子の刻なり

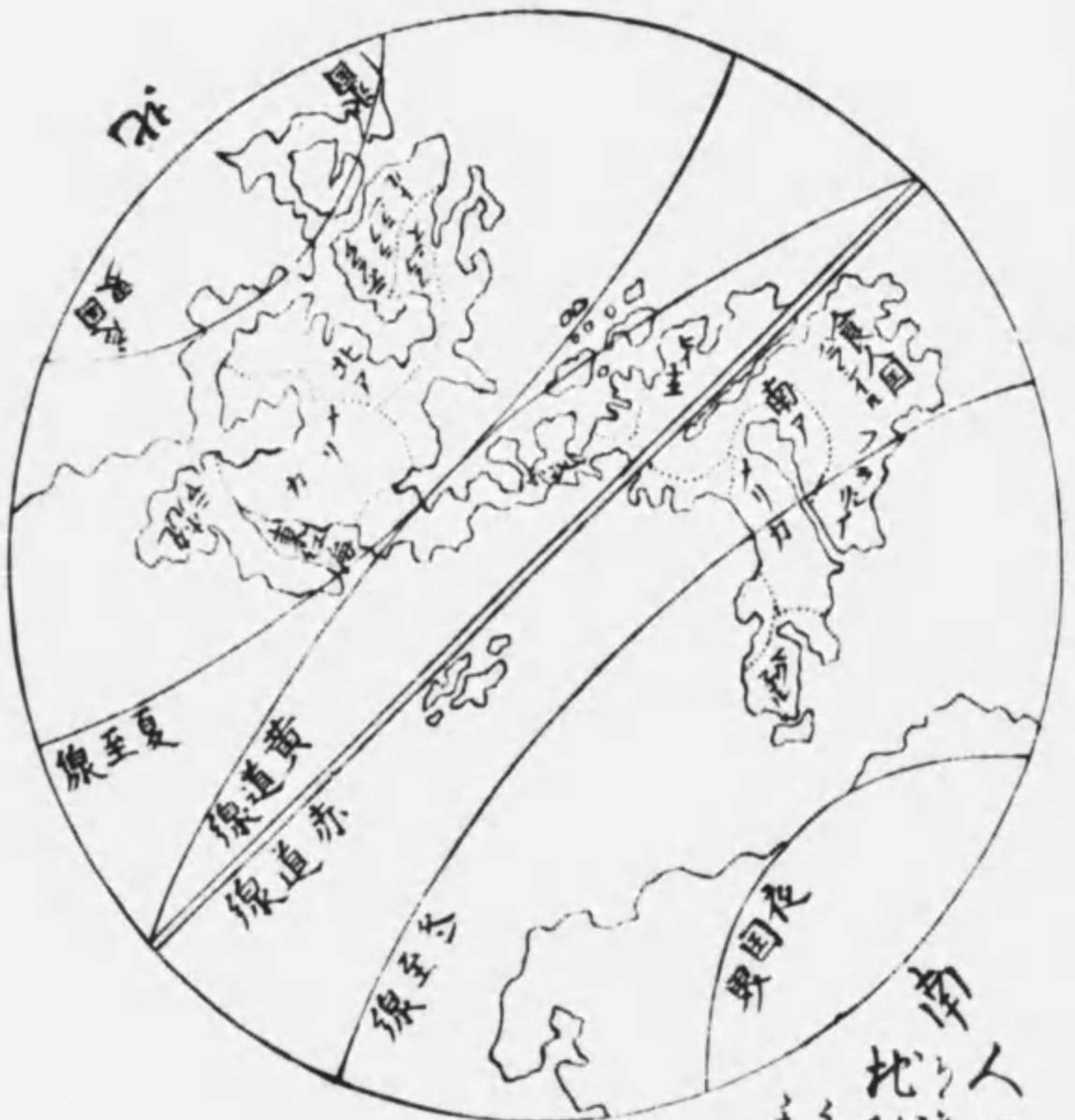
地球半面之圖



地球の面積は
 一億六千九百萬
 平方英里に
 達するが、
 陸地の面積は
 約一億一千
 七百萬平方
 英里に達す
 る。地球の
 表面積の約
 七分の一は
 陸地である。
 地球の平均
 半径は約
 三千九百
 六十二マイル
 である。



其裏



南
北緯と赤道の
出づる
北緯と赤道の
出づる
夏至線
黄道
赤道

此圖地を圓まりて拍ちやく速そくのみく。まゝこの胡こ杭かうの種たねれとく
うゝゝ。また所ところを山さん岳かくとく。低ひかきを海うみ河がはとく。平ひら
らうなる知ちと田う圃ぼとく。人ひと居まりなりとく。こゝりまゝと。
ゆもなと天あま中の埃ちりが集あまるて出で来きぬとく。おてこゝりゆま



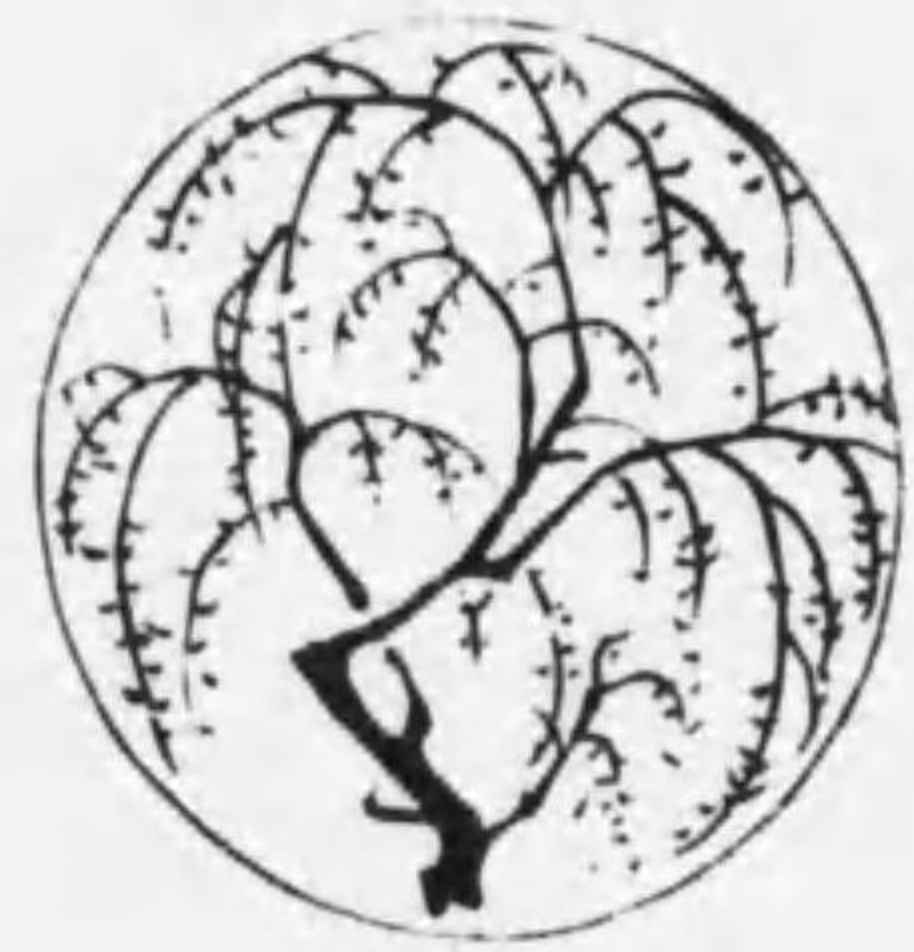
地ち方かたとちの北きた面の半はん面めん見みまう。こゝの
半はんを中ちゆうのでこゝりゆと。東あづま北きたとく
北きたの北きた方の氣きとくけまう。北きた大たい
南みなみ方の姿すがたゆります。次つぎの品しんと見みま
ま

人如图



針木も縦一丈
伸る横一丈の
勢あり

元地球なる由念あり
是より如象あり
是物地より生じて地之底
らぬものいひたりませぬ



此小地球と申す地の形と申すをいふる

此帝知尚の教

一ありと申すもやまもなもとと云の代り
ありと申す事にて申す事。人を象と云ふも
肉の天の出入りやと申す事。此の如く申す
とも刻限の業用なし。あつるい事。やが
とてかじの事。と申す事。此の如く申す
いふ地なるも。やまや。わのく。復の
扱又行と申す。天の星乃地。移りて。安の
より。安と申す事。東と申す事。南の火と申す
中央と申す事。西と申す事。北と申す事。

ありと中の別みねのきど。あふれぬまきし。きい面の
 もろく、あふれきあり南よりあふれをへてきい面の
 つらとて火ふみきあり。燈などもあふれにうらぶ。みき
 へんます。中央より土の色黄らまると面のまらて
 土赤と白と黒ととみきあり。叶成とけ氣と徳と
 生むと名。花もまらるとさうり節を。保し、黒色の花うし。
 此れ、みよきからと名。二晩の花葉、焼くはず。實は
 黒色多し。実の色子よく種たまるが。一晩の如うり。
 花は金と白と。まき面のまらとて黄金赤細き
 後まらとて磨くか奴しとまらとんゆの色とみきあり。

水の水の色黒く。水の色黒く、水の色黒く、水の色黒く、
 るが。あの本性と黒黒く、後うりと堅く。後い
 らふれれど水色のよふかまらう節を。まらここ
 年と日、不照、水をう節、まら。を界中一の
 水、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、
 岩洞、まら、日、まら、まら、まら、まら、まら、まら、
 後、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、
 節を、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、
 まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、
 後、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、
 節を、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、

らんまじらと申す。肉眼も見る事ふあつと眼と守て
心と考つ事ぞ。君ら別れ。かきこひつと思ふ
中せ。只君と六つをむらへ。六角なり。
水の字も六角。精も六角。水も六角。釘は六角。
角は折れと。火は難と防ぐとあがり。あとなり。う
知ら。七歩の陰ふ。七歩の陽と合する。相し。陰中
陽なり。火は七歩の陽ふ。七歩の陰と合する。火は陽
中陰なり。たぬきの中。とら。白と黒の色と。と
暗夜と。ゆふ半がけき。と。さうれ。最上なり。火の
次。水位。すの。黄色。うり。余の色。と。周夜。か。黒く

見ゆ。是子。此。さ。不。奪。と。う。あ。で。と。う。り。ま。す。禁。の。涼
と。故。實。あり。只。ま。と。み。味。と。み。行。り。味。と。木。の
味。酸。と。ま。ら。面。乃。味。と。あ。み。味。あり。是。各。志
す。の。よ。折。ら。り。火。は。味。若。く。と。と。面。の。味。と。割。取。ら
し。方。と。う。り。み。味。と。ま。す。火。が。る。と。と。一。切。あ。づ。く。なり。
おの味。甘。く。是。向。の。味。と。比。より。刀。切。と。ま。も。思
ふ。み。味。あり。令。の。味。辛。く。是。向。の。味。と。ま。も。の。金。と
香。あ。り。て。紙。と。と。や。ら。う。と。み。味。と。う。り。小。の。味。酸。く
ち。ま。と。向。乃。味。と。と。と。と。と。み。味。あり。あ。も。と。香。う。け。く
る。れ。と。み。味。あり。碱。と。味。乃。み。と。け。味。ら。り。ま。と。と。ら

介の味合(あじ)は小豆(あずき)と塩(しほ)とで好(よろ)む。若(わか)きものは
揉(こ)んで粉(こな)にする。又(また)味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの
味(あじ)は梅(うめ)の備(たもと)り。大(おほ)中(なかつ)ふ入(い)り。百(もも)年(ねん)と
なるを味(あじ)はう。好(よろ)む。又(また)味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。

取(と)り。活(か)る。乃(すなは)ち来(き)し。一(ひと)つ。好(よろ)む。又(また)味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。
味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。酸(す)みの味(あじ)は申(まう)す。

きうきうきう。百歳二百歳とすれども活る房とて若
竹とせむごとく然るなり。果実を食ふたれども。古くは古くは
いふくさるるなるあり。そら油なる氣あり。洞ありく
のくや活のおふ房のく。田舎くさるるまふ。新製とて
古物のけごとよりそ能く振るるも。人ふなりませ
ぬら。死ぬ田舎の事ていふなりませぬ。いふくさるること
笑のくさるるを輪して。種を食てそ不養生とていふ
おとまゑいふけり。あもは中し。難を箱に入あり
くといふくさるるなり。まゝと振るる。種を食て
生ゆるなり。そ活るる房とていふくさるるまふ。庚の

岩中ふつらつら目くお活易合うく活るる幸ハ大
くそ製く美物く用ひるる合うまが死ぬなり。そ
まゝとい振敷百年と健は活る房の揚り尾との
續豊前國宇佐奥の院に居てある活。こまふハ
能く富よりよりのかどて。活るるに知らんか。そ
次女は振なり。つらにけり。大氣まらる。活の活るる
ゆゑ。ねえ。よきあり。ひきこありて。次女より。こ
ふさぐらなり。又抱けく打ゆて。も。鳴と書一の
て。一。時。活る。待ち。接先とて。押へ。し。こ
湖より。い。ま。す。め。け。の。活。ま。こ。ゆ。ま。こ。ゆ。ま。こ。ゆ。

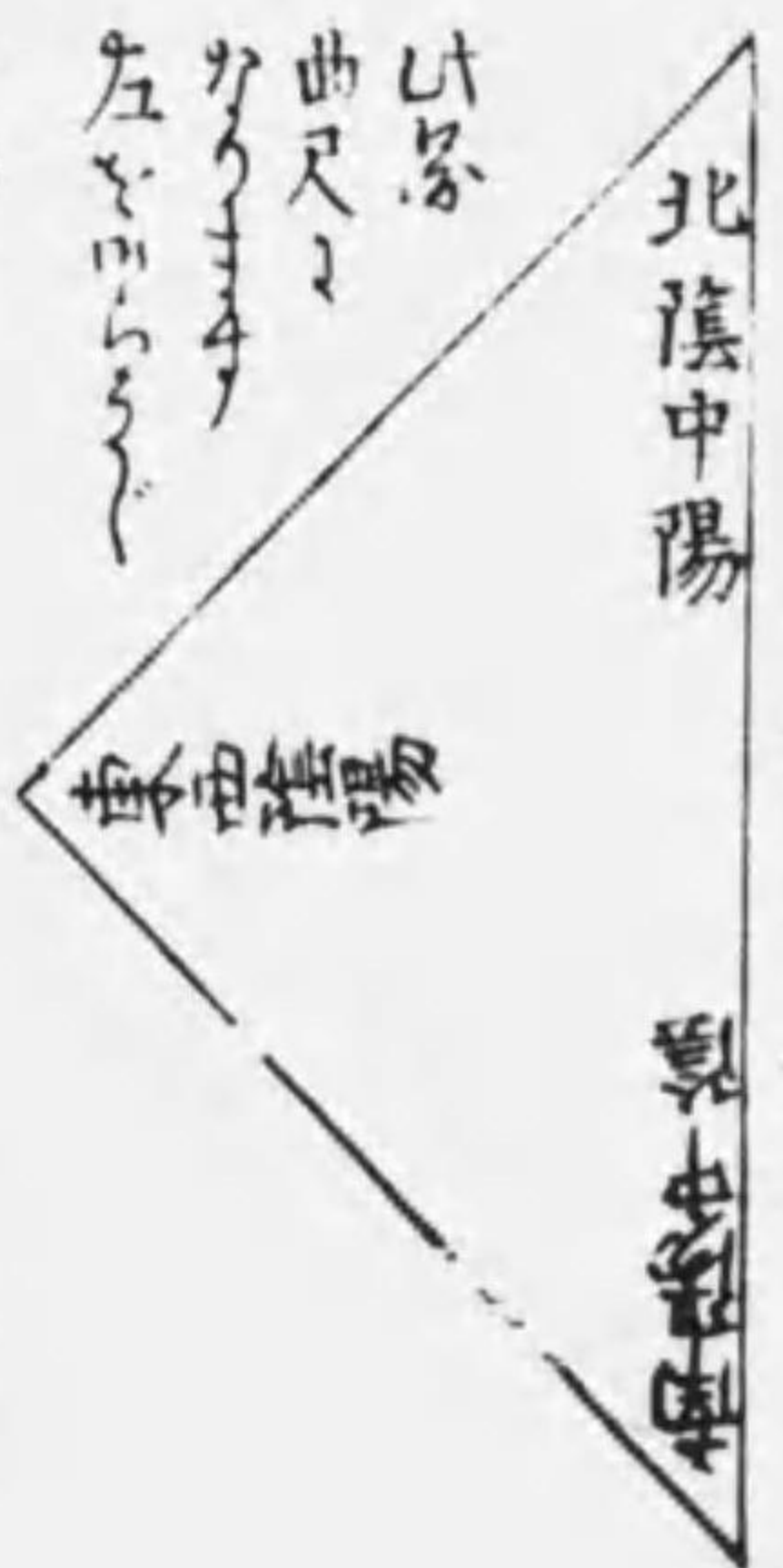
壬の流水井ありと知くあひ急活らう。其の汲
 垂く古姓より死の水より保く救日るあまきあ
 小倉まで虫まことあかるとけし。是を活く處り
 どりうなり。あわ一切死く赤活る處ぬおら
 ませぬ。行くの考へあま味のあま知てござります。



如北の陰中陽と和合する如
 合なり。南の陽中陰と和
 陽の陰中陽と和合して

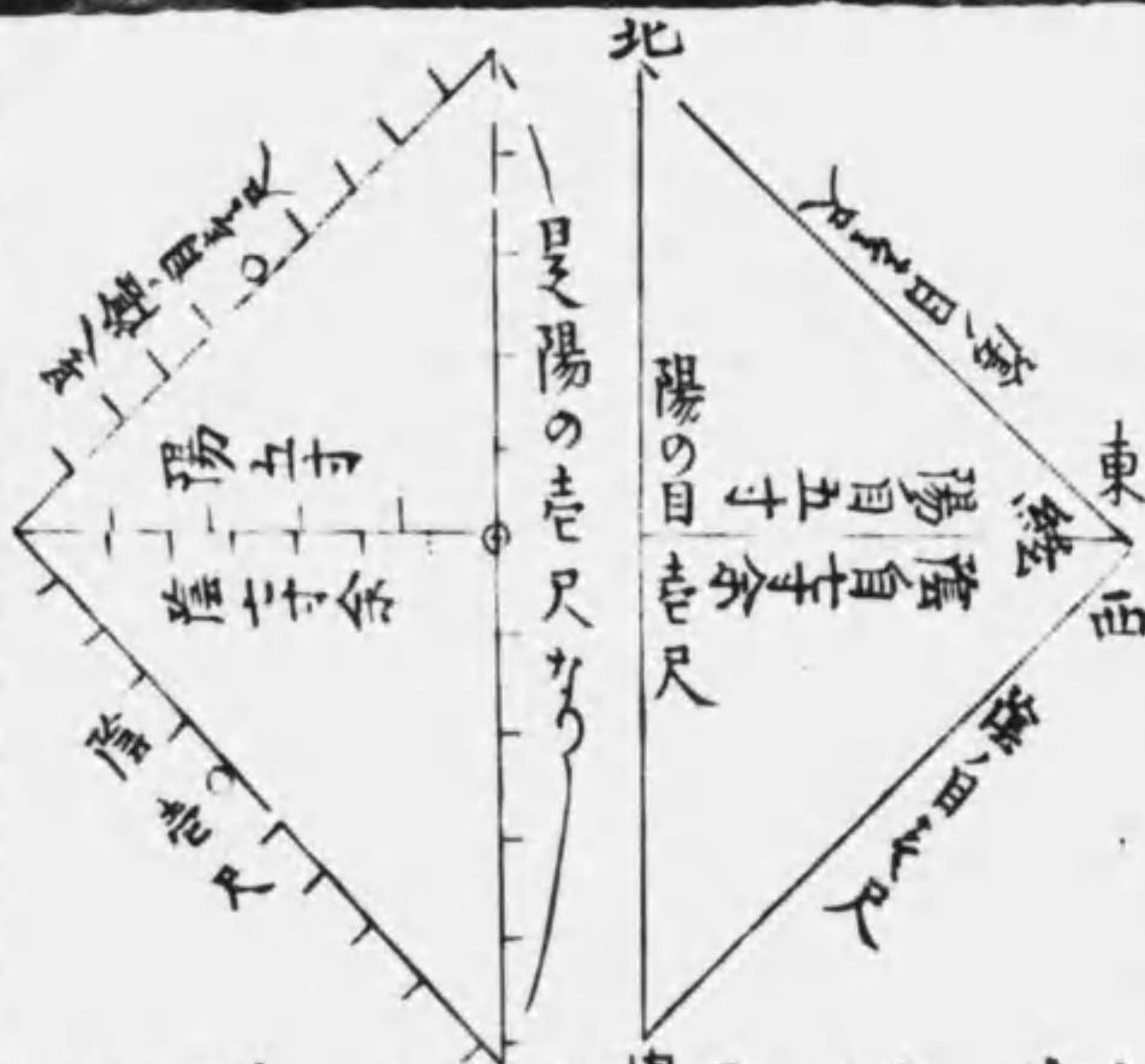
一氣なり如是と云はざるは
 して人くぬぬ。其の要と人散
 かげます。

東西和合書



如圖之氣なり。其の要と人散
 甲申乙酉の氣あり。其の要と人散
 申酉の氣あり。其の要と人散

物へまゝて万物のすぢを定括入まゝにぬらうと
 ぬらうとぬらうと様づけ目とぬらうとぬらうとぬらうと
 のふたつぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと



北は北角より南の角より
 西は西角より東の角より
 東は東角より西の角より
 南は南角より北の角より
 陽の目一尺なり又北
 角より東の角より
 西の角より東の角より
 東の角より西の角より
 南の角より北の角より
 北の角より南の角より



陽の目一尺
 曲又三寸五分
 陽の目寺
 陽の目一尺
 曲又三寸五分
 陽の目一尺
 曲又三寸五分

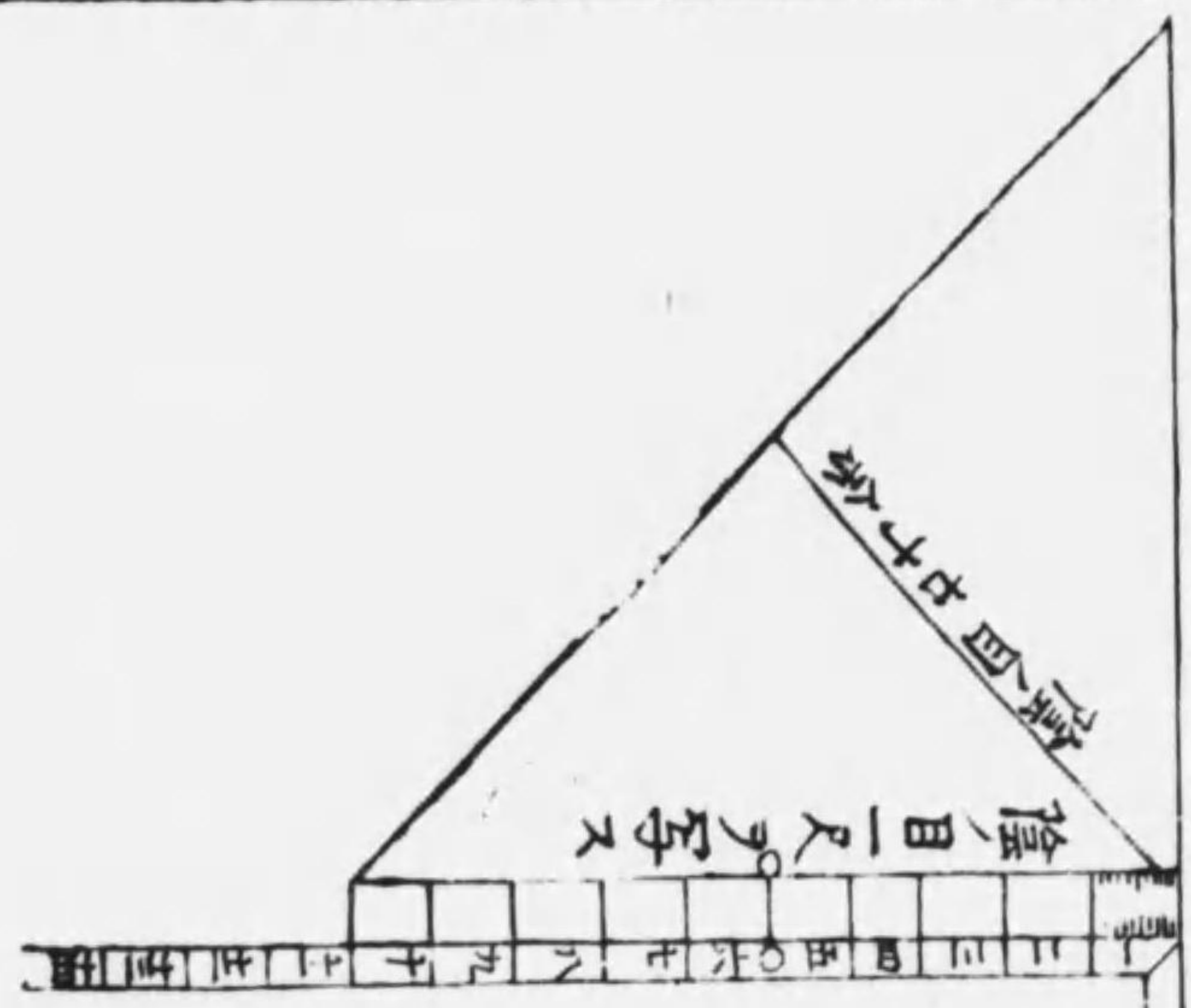
今時の人は陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の
 陽の目と素ふ月の

如圖の花規
 粗の目と
 写し取て
 曲尺
 曲尺

曲り
 陽の目
 陰の目

陽の目五寸五寸

七寸余餘ノ寸



陽四尺九寸八分

け陰陽の曲尺を以規矩
 ついたまが活物として天
 下の^{わづか}ま^をなる^{なり}の^をふ^ふ叶
 れ^し物^にと^ち取^る地^のと^の
 され^ず陰陽不備^を
 陰陽の象と云ふ人

天



横規矩

地

四の象

壽

陽の目

太田字と云ふ^{いん}
 規^{ねい}は^わ曲^まる^{なり}な^り
 規^{ねい}は^わ曲^まる^{なり}な^り
 規^{ねい}は^わ曲^まる^{なり}な^り
 規^{ねい}は^わ曲^まる^{なり}な^り



蛇^{へび}
 蛇^{へび}
 蛇^{へび}
 蛇^{へび}

たのむことい新地おしつけぬし。おふをゆとはけおこて。
 ちかみしんせいのふたり。いんせいのふたり。いんせいのふたり。
 ちかみしんせいのふたり



髪なまこと一本ぬいじんまがゆともまき
 こまかとおお。いんせいのふたり。いんせいのふたり。
 ちかみ。天の飛地なる指まき。いんせいのふたり。
 色のいんせいのふたり。いんせいのふたり。



鳥のたのむこと

鳥の新横いんせいのふたり。いんせいのふたり。いんせいのふたり。

わらわすく横いんせいのふたり。いんせいのふたり。いんせいのふたり。



横へ度
 おの
 おの
 おの

魚の
 おの
 おの

魚の
 おの
 おの



いんせいのふたり。いんせいのふたり。いんせいのふたり。
 天中へ生お和有情地。

いんせいのふたり。いんせいのふたり。いんせいのふたり。
 あらうごころります

○叔人の一巻の小天地と申すは天地のるふあり
 りのの日月又星垣星ふあるまを修ふあり有金の
 體中一筋とぞ修くことありまう先めりて一の修
 修かゝる竹木あり火も心の修くまじり物の中
 ありけ修く物中の心修のはじめとて修の毛と
 丸くありまうまゝとぞ修く物と火のまじり暑
 を人修くその太陽なり。修の修八修とて修心
 はくまじりまうなりけ肺の修く息をいこと
 修でくまじりまう。後と物ありと。ワウカクニクと
 中はく修くしてまじり小修の二修なり

け下小汗の脬。脬の脬胃の脬腎の脬あり。け
 腎の脬をええ火とて空中まうまじり
 比せり火なり。大腸小腸の脬ありつぐ。
 脬と申すは小水の脬なり。陰囊の腎
 水と製するふなり。頭中の脬脬とくまじりまう
 のおつてまじりなり。眼のまじり細くまじりて修あり。
 けまじり性通あひまじりまう。まじりいなる。
 この系乃病なり。まじり眼中修くまじり。身の
 中よ。脬骨と細く骨たたくとありけ脬の
 中よ小穴あり。まじり性通あひまじり。脬の

けまぬいぬりませぬ。又體中ふ十二穴ごころりませぬ。
頭ふ兩眼お鼻お耳口と七穴。もと北斗七星と
おろあふ根もと北なり。下ふ大小用をこ二穴。よの
九穴。おんま。たおの乳まこ。腎水のゆるる。けこ穴の
隠しこころりませぬ。そよりゆるる。そのひもくこころり
との。九穴よりゆるる。おのぼろふ。この九穴より
つこころりませぬ。一時ふ九つの迷ひがこころりませぬ。堂後
合ふ。百八なり。眼ふ舌息とらん。鼻より舌息と噴き
耳ふ。よわくとひ。おふ。よわくとひ。下のお穴と
通ひの舌息ありけ。迷ひと失まらんがこころりませぬ。百八の

教珠と持ん。心の結繩なり。又種を百八煩惱供
養と申す。堂後十二支の明九つと定む。こ
十二時合々百八突つてこの黒物なり。あつくと
をを信し時と志とん。めれを鼻よりけり。月白。
そのひ身の先夜の刻を。一陽来復の時。お
一日の初なき。陽の一九と定はのる。九つ
突く。故に九の時より事なり。初りませぬ。世の初
こころりませぬ。二九十八とかりませぬ。ハツ突ませぬ
中ハツ時なり。寅の刻ふ。こ九二十七
となりませぬ。セツ突く。あ七時なり。卯の刻

左のより右に陽からぬけ方をと東とく右のより陰
 らぬけ方をと西とす。是また右のより左東西なり
 頸も北なり。是も南なり。地球も北をきく南
 も低く。地も人も日折なり。眼も鼻も耳もたは
 陽。右を陰らき北を陰中陽。是を陰陽とす
 南へ陽中陰。右の通阴阳のゆり方を地球は日
 折てござります。脊の旁の尻までを表を陰。是を
 玉の裏を陰。腹の旁のわきの裏を表を陰。
 是よりいへば表を陽なり。顔も面もくび面の
 字のうら表へなく。一匹のお表中小面あり。裏中小

面ありを裏とて中絶なり。擗たる有りたるも
 表裏とも小面なり。美物月を細り知る皆肉と
 て表なり。陰なり。虚なり。虚を人の中より実と
 すと虚実南分る美の法なり。大半の
 おどやくよくあ考へるも
 叔當御流とも相情死相なる竹床と手折
 杖より蛇の姿とゆる挿多なる。活相といは
 例々々々々律佛へ供ぐ。吉徳も月い高位高
 官乃御翁の郷會恵ゆるゆるなり。さまさま
 是を初とる人も不の有法とす。

只一ツ。形地とやしと只一ツ。何の法もとも火の法
ありはあはれ。天を翳さくた旋く。地を翳して
た旋す。呼吸と翳。呼吸と翳。たのちと翳す
とこの木のはを翳す。木の枝を翳す。木の
ていと翳す。是天地のたを翳す。あはれ。こまじ
有法のえんごごうります。

扱拵いたの流名も圓をふくると人々獲てこ
とら入。あはれ。の法はあまきも。この法取よりうさわ
るまいと。ゆるう。又出生の論をゆらう。ゆるう。
皆眼あの変りうしてまらう。出生を辨くうらふ

あはれ。お合ませぬ。先竹の秋部あり。中の邊
拍部枝もなくす。と伸る。獲おれ。たはして
美の不出ぬり。花さす。夫の多。笑のあはれ。
あはれ。まらう。このあはれ。味。絶葉。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。

けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。
けが。まらう。の出生ととまらう。あはれ。

ま席中も花のゆく清くふくむくふとわし
く後の中と花のゆく。藤の掃除とくくわい。
うぞ神佛の心ふくと叶ふとぞんぐまます。と
州本の種乃変と。實と中。みと中。仁と中。ゆき
もは念と。くくうまます。たのみ字とんぐます

天 仁 元 實 子

み字もり念く減なりゆき根なり。くまを
為り又生く又代を半なり。腎は字子
まこくまもまも。まもは念の。ま本の腎あるはひ

らふ満とまが肉ふ止く仁ふなります。ゆき
仁と有の半と大切くくまとして感のまうくふ
ゆきゆき花咲あり。又くくつひいて咲あり。是は
あつるまあは花ひく痛まぬよん終くとわら
ますのくくくうまます。まもくの花乃定命と
くも。花ひくく腎あるのあつるの半とくくうます
船具くくく一の通ひくく。日時くく。豊
葉の十二時めくあり。椿をく二十六時めくあり。
け介一切の州本花ひくくの右水肉ふ止くまど
まもも花をくくまも。まもも難ふあつく時

らむをむらむが美ちのぬもの。掃きこみ半面
掃あり。半面を掃く。たむ花びらのこころ
ふの種なきもの。又花の影なき。花咲ぬおと美
の姿あまそとたて蒼あり。石月うつつらむの白き蒼
ととまらたらまら磨ります。美の姿あまらうのこ
花咲花中の腎水中おしりあふなり。花委く
くらお生傳受の砌に入ります
根仁の字もあまら大幸でござります。洗ふ所大徳の
御方ハ仁とやまます。玉地け文字のこころを磨くこ
ろんもたてござります。扱人問の大徳と申すの

せふおぬ前より死て朽木の皮までと奇へるこ
なり掃削ふしと皮ての心なりませぬ半
船葉の若くそと葉ととくたむら知まます
美極楽へ行くの心好く死なぬ心極楽へ
行く被地の中と心ぬ知れぬ心さます
知ぬ心むらり掃子の心とねでござります
そと葉目も先年んやなうねとさります
かんと申す。生かす心ぬれ半なり。保しし
まら心のでらしてと。さんと男と合ませぬ
ゆく美のそととあひ。そと年んやなうませぬ

でござります。碇いしを九段とくくつうふみりので
先九本と角ふとう。八角ふね。十六角ふとう。まう
三十二角六十に角百二十八角二百半六角も
いふとち大角九ふなり。まの丸くくふたのどく
角をあまうちひりなりませぬ角とくうの半と
まふとくうま物なり。ふとある本と九いとち人の
けまきい修くゆ変も知くうと土層み人じやの。
ふ人じやのとちがく。新あまきとあまい煙地
明白のひ本ふも度まきとまが。まの實の仁
でござります。碇のたわ刻花のふくたう。せきと

と半で新うく。さううーとをゆりなり

かゆい
かゆい
かゆい
かゆい

あう
あう
あう
あう

あう
あう
あう
あう

たよ拵花の次如と四月くうひます

○縦花規矩置花器柳方

陽の坪方

客位と号



陰の坪方

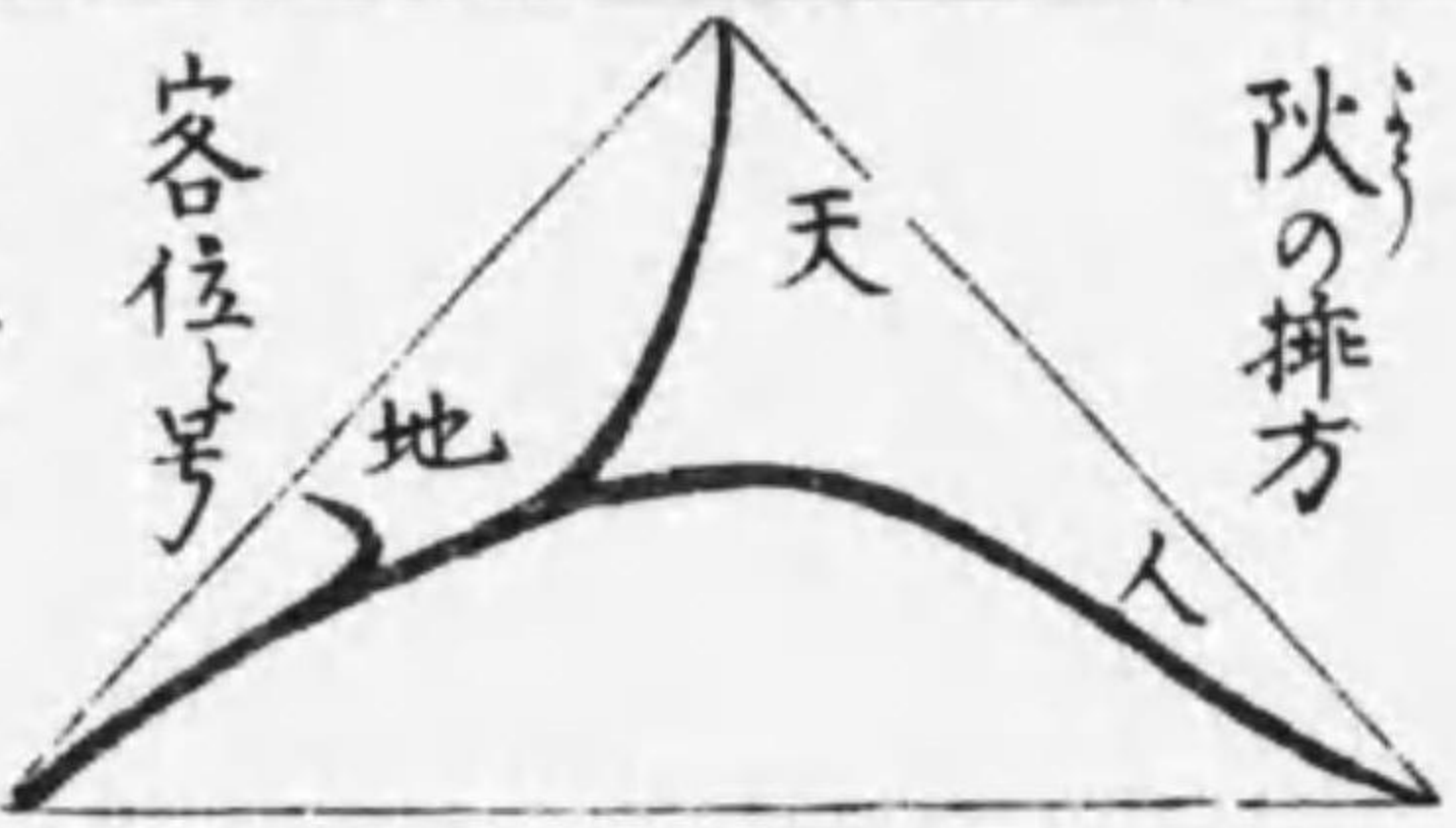
主位と号

坪方よ六用の枝と初より入る。是人なるを。主より射主より
 多く入る。是坪方の安ん天地万物の形地と以て扱てさるるなり

枝の唱へ天人地は三枝と
 射用留と号してあつたりなり。射の
 丈ハ陽の目の寸。用の丈ハ陰
 の目の寸。留乃丈ハ紐の寸
 ぬ是法を守りて。その他のおし
 と背より坪方ふ。花そのか
 えなり。以上教百本坪方
 とも受け流し唱ます

○横半規矩掛花器坪方

秋の坪方



秋の坪方

主位と号



用の枝ハ陽の目此丈
 射の枝ハ陰の目乃丈
 留の枝ハ紐乃丈
 是より用の枝より入る
 主より射留とつたり

掛花は六用の枝と初より入る。是人なるを。主より射主より
 多く入る。是坪方の安ん天地万物の形地と以て扱てさるるなり

是より新州と曲の安あつたり夜膳をまて文の
 足首の静をて止つり定法。中ねの首の静
 ませり定法。羽織袴の丈の衣裳の丈三割二分
 り定すかり。又羽織乃丈七寸と好め。定の寸
 より約寸長し。又袴はとも半一。なるよりなり
 ます。又胸袋の糸襦袢をゆくりゆくりの曲天
 とひまりり約寸長と約寸と定めたり。又月割
 の名今うの曲天と月ひげ襦袢をくりくりと
 ましりし約寸長と。安くおあつたり
 序々干支起下地の古めと中入ませり

十干古め

- 甲日 糸と軍び袖抱おど
- 乙日 田と更す田を老澤り
- 丙日 金洗をいそす老澤り
- 丁日 水と起す夜とたど
- 戊日 金洗をいそす老澤り
- 己日 水と起す夜とたど
- 庚日 金洗をいそす老澤り
- 辛日 水と起す夜とたど
- 壬日 水と起す夜とたど
- 癸日 水と起す夜とたど
- 子日 占と問ふす更あり
- 丑日 占と問ふす更あり
- 寅日 婚姻結婚あり
- 卯日 丹とねびねのげあり
- 辰日 人を吊す友と綱あり
- 巳日 人を吊す友と綱あり

十二支古め

○午日 極意せむ事作らず。○未日 意を結成り嫁とす。○申日 百年より月より。○酉日 婚成りて家成り。○戌日 終と終つて嫁とす。○亥日 終と終つて嫁とす。

十二支吉凶

○建 け日 元服 極意 出行 ます。○卯 物と物と知む 奴婢と抱く ありし 終と終つて 妻人より 湯へ 嫁れ 大吉。○辰 日 社と終つて 病と治し 意を合 媒と掛 福と祈り 半馬と中より 井と掘り 大吉。○巳 日 家と遠く 移後 嫁れ 出行 富あり 終意 知り あり 大吉。

○平 け日 造作 移後 嫁れ ます。○奴 婢と抱く 新衣と

○定 け日 家造。○か とう。○婚 成り ます。○奴 婢と終つ

○執 け日 網と終つ。○盗 賊と捕り あり。○金 あり。

○破 け日 病と終つ。○家 と終つて 垣と中より あり。

○危 け日 網と終つて 魚と終つ。○木 と終つて 酒と造り

○成 け日 終と終つ。○家 成り。○移 後 嫁れ 出行 ます。

新長とくろく

○納おひ け日家作。家うつり。嫁より入学ありけり。

納。魚骨と捕し。木と植ふ。大し。

○用り け日。子谷とくろく。移住。婚姻。如外。入学。まこと。

病を療し。福を祈る。作とあり。念とくろく。

そかの若夏。小月とくろく。

○測はか け日。井と埋。穴とくろく。花束とくろく。紋と

細め。まふいとまひ。酒と捕し。廁と作。お

よし。余とくろく。

下段

○天てん 日。若年。くろく。不用。

○母はは 念。くろく。大吉日。○月つき 徳。吉日。

○天てん 火。造作。屋根。くろく。大凶。大くろく。若年あり。

○地ち 火。植和。種。くろく。凶。

○復ふく 日。一若。年。若日。くろく。大凶日。

○重ちゆう 日。魚。日。かろく。○血ち 忌。血とくろく。凶。

○黒くろ 日。大。忌。日。くろく。○十じゅう 死。大。忌。日。

○付つ 亡。大。忌。日。○帰かへ 忌。大。忌。日。

○大おほ 墓。日。忌。日。○大おほ 禰。大。忌。日。

○狼わう 籍。日。大。忌。日。○城じやう 門。大。忌。日。

○凶令日 忌日 ○八專 忌日
 ○兼下食 忌日 日く苗時凶。下食時と忌む
 ○天一忌 吉日 ○社日 百廿家大切の日
 ○三伏 忌日 ○半夏 凶日
 ○十方書 凶日 九ホ大忌 ○土用 ちと程すゝ忌
 木の通り忌日多し 吉日 天教大明の二ツウ
凶令日 初まり十五迄三十日分なり
 金火木土金 火水土金木 水七火木小

昭和九年九月廿五日印刷
 昭和九年十月一日發行

家元藏版

發行兼印刷者 未生齋康甫 肥原四郎

大阪市北區市之町十七番地

發行所 大阪市北區市之町十七番地 華道未生流家元

電話大阪北一四一六番

終